宇土城跡（西岡台）Ⅲ

－保存整備事業に伴う第９～11次（平成９～11年度）発掘調査概報－

宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集

宇土城跡（西岡台）全景

２０００年３月

熊本県宇土市教育委員会

序　　文

国指定史跡宇土城跡は中世の在地領主である宇土氏・名和氏の居城です。豊臣秀吉による九州平定の際に８代名和顕孝が開城するまで菊池氏・相良氏との抗争をはじめとする争乱の舞台となりました。

調査が行われた千畳敷をめぐる堀は名和氏が治めていた時代のものと考えられます。新聞やテレビで報道されましたとおり、工事途中のまま放棄されたと考えられる堀跡が確認されましたが、これは中世城郭の空堀において全国で初めてであるということであり、学術的に貴重な発見となりました。さらに、宇土城で初めて鉄砲玉が発見されるなど重要な発見がありました。

平成９年度に学識経験者による史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足したことで、保存整備のための体制が確立するとともに、翌10年度には史跡宇土城跡保存整備基本計画書が策定されました。平成15年度を目途に千畳敷地区の保存整備を行い、宇土城の歴史的・文化的価値が誰にでも理解できる遺構の復元施設や表示施設の整備を継続的に行っていく予定です。

本書を発刊することで、宇土城跡の調査成果を一般市民の方々に知っていただくとともに、文化財に対する保護と活用の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、調査ならびに整備にあたってご指導・ご助言をいただきました文化庁ならびに熊本県教育委員会、史跡宇土城跡保存整備検討委員の先生方をはじめとする関係各位に心から感謝申し上げます。

平成12年３月

宇土市教育委員会
教育長　坂　本　光　隆

例　　言

1．本書は、宇土市教育委員会が平成９～11年度にかけて実施した第９～11次史跡宇土城跡発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査の実施にあたって、平成９～11年度の国庫補助金と県費補助金を受けた。
3．城跡の名称は特別なことわりがない限り、発掘調査を行った国指定史跡宇土城跡（西岡台）を「宇土城跡」あるいは「宇土城」、小西行長が築いた市指定史跡宇土城跡（城山）を「城山」と表記して区別する。
4．発掘調査で出土した遺物、実測図など関係資料の保管は宇土市教育委員会が行っている。
5．調査担当者は、第９次調査（平成９年度）を教育委員会文化振興課木下洋介参事（平成11年度より主幹）、湯上真行主事、第10次調査（平成10年度）を木下、文化振興課藤本貴仁技師、第11次調査（平成11年度）を藤本が行った。
6．遺構の実測は湯上真行（第９次）、藤本貴仁（第10・11次）、株式会社埋蔵文化財サポートシステム（第10次）、株式会社ダイチプラン（第11次）、野村健一郎（第11次、別府大学生）が行った。遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、遺物の写真撮影は藤本があたった。
7．航空写真撮影と航空測量は、株式会社スカイサーベイが行った。
8．本書の執筆・編集は、木下・高木恭二（宇土市史編纂室長）の助力を得て、藤本が行った。

目　　次

第Ⅰ章　序説……1
　第1節　調査の経緯と経過……1
　第2節　調査組織……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……3
　第1節　位置と地理的環境……3
　第2節　歴史的環境……6
第Ⅲ章　第9次発掘調査……8
　第1節　調査の経過……8
　第2節　遺構……8
　第3節　出土遺物……11
第Ⅳ章　第10次発掘調査……12
　第1節　調査の経過……12
　第2節　遺構……12
　第3節　出土遺物……17
第Ⅴ章　第11次発掘調査……19
　第1節　調査の経過……19
　第2節　遺構……19
　第3節　出土遺物……22
第Ⅵ章　考察……24
　第1節　千畳敷北側空堀跡について……24
　第2節　第9～11次調査出土の土器・陶磁器について……27
第Ⅶ章　結語……30

挿図目次　第1図　位置図……4
　第2図　宇土城跡地形図……4
　第3図　主郭（千畳敷）遺構図（平山、高木ほか1977を改変）……5
　第4図　千畳敷南・西側空堀測量図……9
　第5図　千畳敷西側空堀土層断面図……10
　第6図　千畳敷北側空堀測量図……13
　第7図　空堀に平行する土層断面図……13
　第8図　開渠測量図……16
　第9図　千畳敷東側空堀測量図……20
　第10図　千畳敷東側空堀土層断面図……21
　第11図　若松城（福島県会津若松市）の障子堀……24
　第12図　千畳敷北側・東側空堀測量図……25

第Ⅰ章　序説

第１節　調査の経緯と経過

宇土城跡の第１次発掘調査は今から25年程前にさかのぼる。昭和49年（1974年）１月に市関係機関が宇土市立鶴城中学校の移転用地として宇土城跡が立地する台地（通称西岡台）をあてることに決定した。これに伴い同台地が「宇土城跡（西岡台）」として市指定史跡に登録されていたため、ただちにそれに伴う発掘調査が行われた。当初は、記録保存を前提としての調査であったが、古墳時代前期の首長居館に伴うと推定されるＶ字溝や中世城に伴う空堀の発見など遺跡の重要性が明らかになり、中学校の建設を断念し、史跡公園として保存・活用することになった。その後、発掘調査報告書の刊行[1]、継続的な用地の公有化事業や保存修理事業が行われている。また、昭和53年３月12日には国指定史跡となり、昭和56年度に史跡宇土城跡環境整備計画が策定され、整備に関する基本方針が確定した。

その後、平成９年度に学識経験者からなる史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足した。また、先述した環境整備計画から15年を経て、文化財の保存や活用の多様化、遺跡の整備のあり方が変化したことからその見直しが行われ、平成10年度に史跡宇土城跡保存整備基本計画書が策定され、整備手法や事業年次計画など史跡整備に関する具体的な内容がもりこまれた。

史跡整備のための発掘調査が行われるようになったのは平成２年度（第４次調査）からで、平成11年度で第11次をかぞえる。これまで主郭（通称：千畳敷（せんじょうじき））、同空堀などの調査を行った。このうち、本書は千畳敷空堀の調査を行った第９～11次調査（平成９～11年度）の概要報告書である。

第２節　調査組織（敬称略）

調査主体　宇土市教育委員会

調査責任者　坂本光隆（宇土市教育長）

調査事務　木下洋介（文化振興課主幹、平成11年度）、野田恵美（文化振興課主事、平成９～11年度）

調査担当者　木下洋介（文化振興課参事、平成９～10年度）
　　濁上真行（文化振興課主事、平成９年度）
　　藤本貴仁（文化振興課技師、平成10～11年度）

史跡宇土城跡保存整備検討委員会

委員長　北野　隆（熊本大学教授）
委　員　加藤允彦（奈良国立文化財研究所室長）
委　員　服部英雄（九州大学教授）
委　員　高野　茂（熊本県立図書館参事）
委　員　千田嘉博（国立歴史民俗博物館助手）

指導・助言

田中哲男・本中眞（文化庁記念物課）
松本健郎・大田幸博・占城史雄（熊本県教育委員会文化課）
冨樫卯三郎・村田房夫・鶴田倉造・舟田義輔・吉田恒（宇土市文化財保護審議会）

発掘・整理作業員

浅川義男、浅川レイ子、石田ムツエ、梅田亜耶、小畑律子、釜賀ヨウ子、斉藤アサ子、坂田昭男、白石節子、園田佳代子、田中真佐子、中村次則、西谷完治、西谷美智子、野添重友、野村健一郎、橋本チエ子、平木君代、福島弘、福田フミエ、占山節子、本田栄子、本田亘、前田昭三、前田房子、松岡鉄生、丸地見典、村山艶子、村山初男、山口陽子、山形ユキコ、山田勇夫、山田敏江、山本忍

調査協力機関

安土城郭調査研究所、阿見町教育委員会、会津若松市教育委員会、新居町教育委員会、岩槻市教育委員会、小牛田町教育委員会、小田原市教育委員会、所沢市教育委員会、保原町教育委員会、三島市教育委員会、焼津市教育委員会、米沢市教育委員会

調査協力者

池田光雄、木崎康弘、黒田裕司、桑畑光博、島田敏男、高木恭二、田中哲男、徳江秀夫、中原幹彦、美濃口雅朗、森本朝子

1）平山修一、高木恭二ほか　1977『宇土城跡（西岡台）』－本文編－宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集（宇土市教育委員会）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　位置と地理的環境

宇土半島は、熊本県のほぼ中央沿岸部から西側にのび、北は有明海、南は不知火海（八代海）を画するように位置する。比較的山がちの半島で、主峰は大岳（478ｍ）である。宇土半島より東の九州山地側には、雁回山（314ｍ）があり、現在市街地が形成されている沖積平野は、これら山塊の裾部に挟まれるようにして位置する。北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在に至るまで交通の要衝である。

宇土城跡は、この沖積平野の西側縁辺部にあたり、標高39ｍ、東西約750ｍ、南北約400ｍの独立丘陵上に位置する中世城郭である。丘陵北側は急傾斜地で自然の要害をなしている。一方、南側は緩傾斜地で現在は住宅地や畑地になっている。基盤層は大岳・三角岳の火砕流堆積物である凝灰角礫岩であり、もろく崩壊しやすい地盤である。

城域は、独立丘陵の大半をしめるものと思われ、東西約700ｍ、南北約350ｍであり、丘陵頂部の東側と西側にならぶように２ヶ所の高位部が存在する。

東側の高位部が「千畳敷（せんじょうじき）」と呼ばれている主郭で、標高37ｍ、東西約50ｍ、南北約65ｍの平坦地である。第４～７次調査（平成２～５年度）で多数の柱穴群を検出し、長期間にわたって使用され続けたことがうかがえる。また、登城口は千畳敷東側に位置し、ズローブ状に法面を掘削した堀込み枡形虎口である。千畳敷から近隣を見わたすと、宇土半島の山塊が視界を遮る南側（不知火海側）を除けばかなり眺望にすぐれており、熊本平野、有明海が一望できる位置にある。

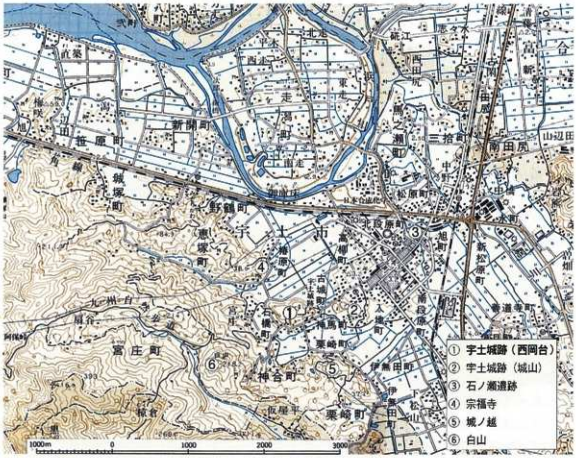
また、千畳敷には内堀と外堀が存在する。内堀は千畳敷を取り巻くように全周し（土橋を除く）、長さ約250ｍ、最大幅約６ｍ、最深部で約2.5ｍをはかる箱堀である。千畳敷から堀底まで比高差約６ｍの急峻な崖面をつくりだし、千畳敷最大の防御施設といえるものである。本報告でいう「堀」あるいは「空堀」は、この内堀のことをさす。

外堀は、千畳敷南側と東側のみ存在する。未調査部分があるため若干の修正があると思われるが、現状で長さ約120ｍ、幅約２～３ｍ、深さ約0.2～２ｍである。このうち、南側で幅10ｍ程度堀が途切れている部分があるが、これは南側から千畳敷へ向かうための土橋状の掘り残しであると考えられる。

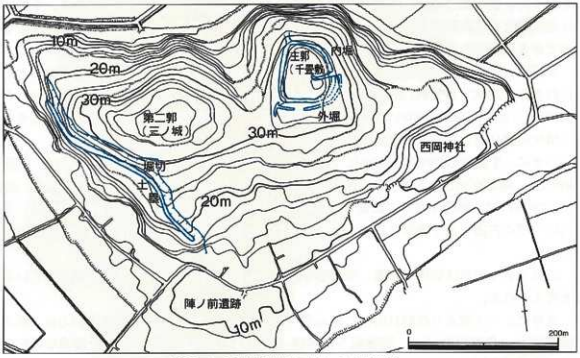
つぎに、千畳敷の西側約100ｍに「三ノ城（さんのじょう）」と呼ばれる第二郭がある。標高39ｍ、東西約80ｍ、南北約35ｍ、１段下の平場まで比高差約２～３ｍである。第１次・第３次調査（昭和63年度）で、郭の中央部では掘立柱建物跡や溝が確認され、東側では門跡、登り口、それにつづく古道などが確認されている。千畳敷でみられたような堀跡は調査で確認されていない。

これら２つの郭は切岸や平場、帯曲輪で幾重にも取り囲み、高い防御性を保持していたと考えられる。

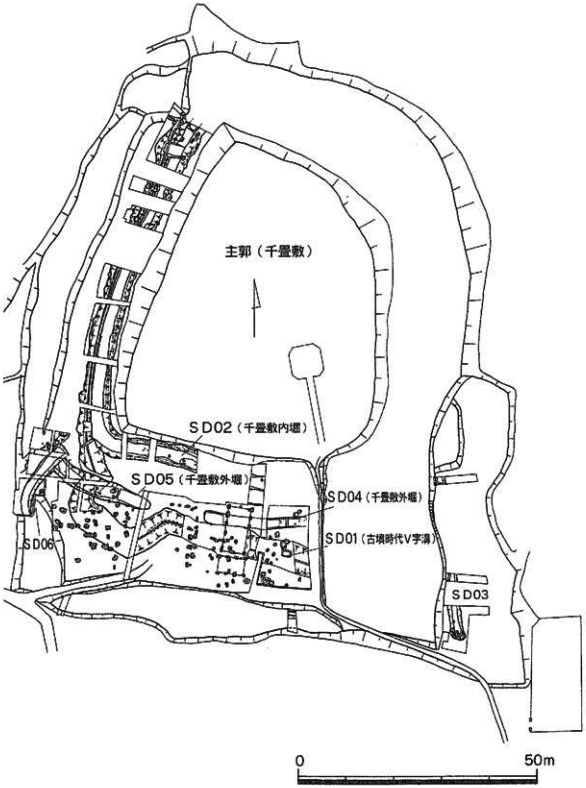
さらに、三ノ城より西約100ｍに地元で「からほり」と呼ばれる、長さ約310ｍ、最大幅約15ｍ、最深部約15ｍ、堀底幅５ｍ前後（いづれも表面観察）という大規模な堀切が城域の西側を画するように存在する。この堀切の西側に高さ約２ｍ、幅５ｍ前後の土塁が



第１図　位置図（S=1/50000）



第２図　宇土城跡地形図（S=1/5000）



第3図　主郭（千畳敷）遺構図（平山、高木ほか1977を改変、S=1／800）

存在する。おそらく堀切を掘削したときに生じた排土を盛り上げて構築したものであろう。

丘陵南側は現在宅地化が進んでいるものの、中世にさかのぼると思われる切岸跡が良好に残存するとともに、「馬場」や「陣ノ前」などの地名が残されていることから、領主の居館や家臣団の屋敷地がこの付近に存在した可能性が高い。

第2節　歴史的環境

宇土城跡周辺には古くは縄文時代から近世までの多くの遺跡が点在している。しかし、今回は紙面の都合により、宇土城に関連する歴史的環境に限って記述する。

鎌倉末から戦国時代の在地領主は、菊池氏系と考えられている宇土氏で、その本拠となったのが宇土城とされている。文献によると、南北朝の争乱期の正平３年（1348年）、宇土高俊[1]は南朝方である征西将軍懐良親王を宇土津[2]に迎え入れている（『阿蘇文書』）。その後、宇土氏は忠豊の代に肥後国守護菊池持朝の子である為光を養子としたが、文亀３年（1503年）にこの為光が肥後国守護職をねらい守護菊池能運と争ったが失敗、それが原因で宇土氏は滅亡することになる。

宇土氏にかわって宇土を治めたのは名和氏であった。名和氏は、伯耆国（現在の鳥取県）に本拠をおいていたが、建武中興の恩賞として八代荘（熊本県八代市）の地頭職を得て以降、八代の古麓城を本拠としていた。永正元年（1504年）、球磨地方（熊本県人吉市周辺）を治めていた相良氏の八代地方進出に伴い八代を追われたが、宇土氏滅亡の混乱に乗じて名和顕忠が宇土城に入り、以後、名和氏は、天正15年（1587年）豊臣秀吉の九州平定によって８代顕孝が開城するまで80年余り宇土城を本拠とした。

その後も、相良氏と名和氏は、豊福城（熊本県松橋町）をめぐり争奪戦をくりひろげるなど幾度となく抗争を繰り返した。また、断片的ではあるが、宇土城のことが記述されている史料もみられ、天文７年（1538年）[3]と天文11年（1542年）[4]に２度の火災が記録されているほか（『八代日記』）、天正３年（1575年）の『家久君上京記』にも宇土城に関する一文がある[5]。宇土城を追われた顕孝は、筑前国内に替地入替となった。

名和氏にかわって宇土に本拠をおいたのは、摂津守小西行長である。行長は、肥後国衆一揆が沈静化に向かった天正16年（1588年）、秀吉により球磨地方を除く肥後南部の宇土・益城・八代の３郡、24万石を与えられて宇土城に入り、翌年の天正17年（1589年）に石垣と天守閣、水堀を備えた近世の宇土城（以下、「城山」とする）の普請を開始した。城山の普請に伴い、城下の町割の実施や運河の掘削など、比較的短期間のうちに近世的な城下町の整備を進めた。

しかし、慶長５年（1600年）の関ヶ原の戦いで敗れ、行長は京都の六条河原で処刑された。行長の弟である小西隼人が城番として留守をあずかっていた城山も、加藤清正の軍勢に攻められ落城した。以後、肥後北部を治めていた加藤清正が肥後一円を治めることになり、城山は清正の隠居所とするために普請が行われたが、移り住むこともなく慶長16年（1611年）に亡くなった。

翌年の慶長17年（1612年）に幕命により破却され、寛永14年（1637年）の天草・島原

の乱後もさらなる破壊を受けた。

現在では、公園、墓地、住宅地、耕作地として利用され、ごく一部に石垣が露出するのみであり、水堀は埋め立てられソイルマークとしてその痕跡を残すのみである。

〈参考文献〉

平山修一、髙木恭二ほか　1977『宇土城跡（西岡台）』－本文編－宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集（宇土市教育委員会）

熊本中世史研究会編　1980『八代日記』（青潮社）

髙木恭二、木下洋介　1985『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集（宇土市教育委員会）

木下洋介、元松茂樹　1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集（宇土市教育委員会）

1）宇土高俊の逆修銘を有する五輪塔の地輪（宇土市教育委員会蔵）が城山の石垣に利用されている（富樫卯三郎　1972「宇土城（城山）出土の五輪塔残欠」『宇土市の文化財』1、宇土市教育委員会）。

2）宇土市網津町周辺と推定されている。（木下良　1979「西海道－肥後国」『古代日本の交通路』Ⅳ、大明堂）

3）「宇土之城焼候」

4）「宇土の城焼候、たのはる（段原）も同日焼候」

5）「松はせ（橋）といへる浦に着船、それより陸ち（地）に移行にて、左の方に宇土殿の城みえ侍り」

第Ⅲ章　第９次発掘調査

第１節　調査の経過

第９次は平成９年６月から平成10年２月の約９ヶ月間行われた。中世の遺構である千畳敷南側・西側の堀跡、平場、部分的に切岸の調査、および古墳時代前期のＶ字溝の調査を行った。本調査区の大部分は、第１次調査で中世の堀跡、古墳時代の首長居館に伴うと推測されるＶ字溝が確認されたところと重複する。まず千畳敷西側、その後同南側の調査に着手した。

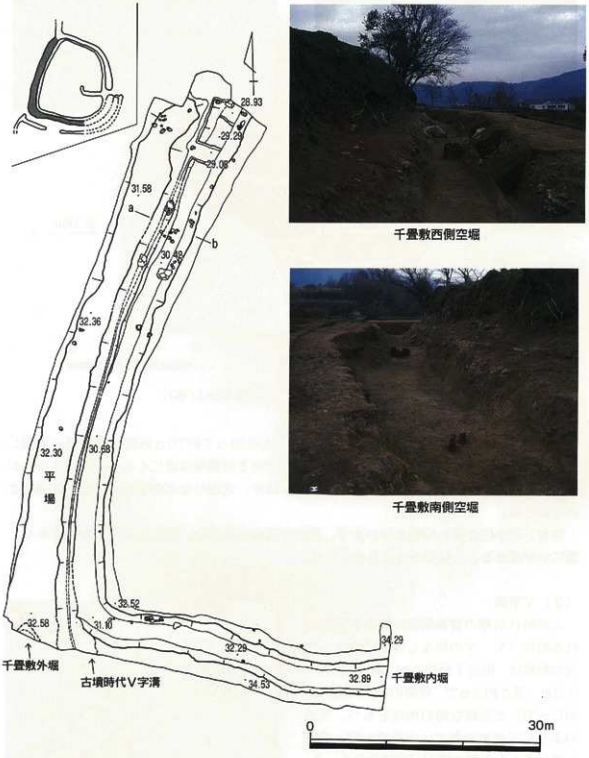
第２節　遺構

（１）堀

堀は、断面が逆台形の形をした典型的な箱堀である。後世の耕作などで多少削られていると思われるが、規模は上幅約３～５ｍ、底幅約２～３ｍ、深さ約2.5ｍ、堀壁の傾斜角度は50°～70°程度である。千畳敷と堀底までの比高差は約６ｍ、南東側の堀底が最も標高が高く（標高33ｍ）、ゆるやかに北側に傾斜して北西側が最も低い（標高29.5ｍ）。

千畳敷南・西側空堀空中写真（南より）

堀は、部分的に屈曲している部分がみられる。堀底は平らにきれいに整形されており、段差などは存在しない。しかし、千畳敷北西側堀の一部では、堀底に段差が確認されるなど様相が異なる。



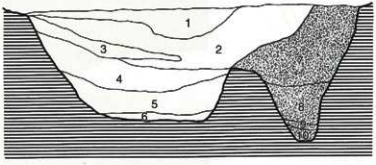
千畳敷西側空堀

千畳敷南側空堀

第４図　千畳敷南・西側空堀測量図（Ｓ=1／500）

千畳敷西側空堀土層断面

遺物出土状況



第５図　千畳敷西側空堀土層断面図（S=1／60）

千畳敷西側堀は、古墳時代前期のＶ字溝の覆土を切って約70ｍ区間ほぼ平行に掘削している。この覆土は比較的硬質とはいえ、地山である角礫凝灰岩にくらべれば柔らかいが、忠実に箱堀の形態を保って掘削している。そのほか、犬走りなどの堀に伴う施設は確認されなかった。

なお、透水性が高い地盤とはいえず、湧水は認められない。堀底にはレベル差があり、堀に水が溜まることはなかったとみられる。

（2）Ｖ字溝

古墳時代前期の首長居館に伴うと推定される断面「Ｖ」字の形をした溝である。現況の規模は、推定上幅約４ｍ、底幅約0.1～0.2ｍ、深さ約３ｍで、壁面の傾斜角度は約40°～70°と急峻な傾斜角度をもつ。先述のように千畳敷西側では中世城の堀と重複しているため東側の壁面が破壊されている。

この溝に伴うと考えられる古墳時代前期

Ｖ字溝断面図

の首長居館が千畳敷に存在したと考えられる。しかし、古墳時代中期の古墳の築造[1]や中世城の普請などで首長居館は削平されたと推測され、これまでの発掘調査では確認されてない。なお、第１次調査においてＶ字溝の上層で、奈良時代の須恵器が出土していることから、遅くともこの頃にはすでに埋没していたと考えられる。

第３節　出土遺物

堀や平場から中世の土師器皿が多量に出土した。その他に雑器類（瓦質土器の擂鉢・火舎・羽釜、備前焼の擂鉢・火舎・大甕）、輸入陶磁器（宋・明代の青磁、明代の染付など）、近世陶磁器が出土した。また、Ｖ字溝からは、古墳時代前期の土師器の坩、高坏の脚部などが出土した。

1）川西編年Ⅲ期の埴輪が発掘調査で確認されているため古墳時代中期に古墳が存在したと考えられる。

第Ⅳ章　第10次発掘調査

第１節　調査の経過

第10次は、平成10年８月から平成11年３月までの約８ヶ月間をかけて、千畳敷北側の堀跡、平場、竪堀状遺構、千畳敷北西側開渠の調査を行った。調査以前にトレンチ調査を行ない堀が存在することをすでに確認していた。本年度調査区の西側から１～４区を設定して調査を行った。

第２節　遺構

（１）堀

第10次調査区は第９次調査区の末端部（千畳敷北西側）より東側にむかって拡張するように調査を行った。調査の結果、この地区の堀はこれまで確認されていた堀の形状と全く異なるものであることが判明した。

まず第１に、堀の上幅は、ほぼ以前の調査とかわらない４～５ｍ程であるが堀底は凸凹になっており、一見すると関東地方に多い堀の形式である障子堀[1]（堀内部障壁遺構）のような形態である。この堀障子状の凸部を計６ヶ所確認した。これらは幅2.2～4.4ｍ、高さ約0.4～1.0ｍで、堀底から立ち上がる角度は75°～85°と急峻である。一見して幅広でほぼ垂直にたちあがった低い土手状の高まりといった形状を呈する。

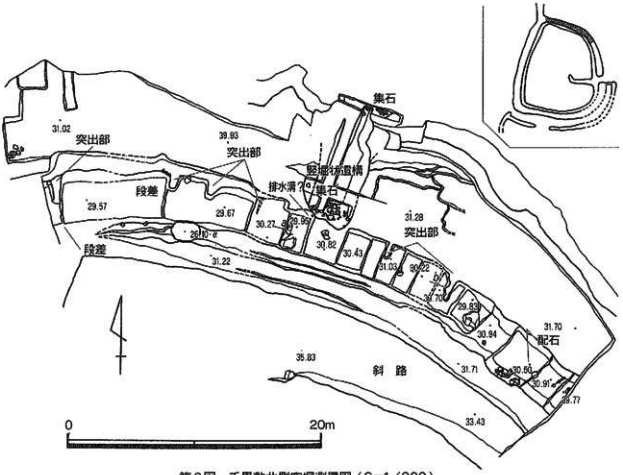
第２に、堀に直交するように地山を掘り残した、用途が不明の突出部を確認したことがあげられる。規模は、幅0.7～1.3ｍ、長さ1.1～2.0ｍで計６ヶ所確認されたうち、全て堀の北側壁（平場側）から千畳敷側に向かって突出するような状態で検出した。

千畳敷北側空堀空中写真（南より）

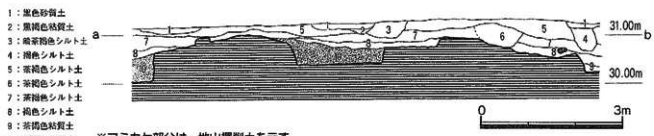
堀南側壁（千畳敷側）にこの突出部とつながっていた痕跡が認められないことから、当初からこのような状態で存在したものと判断した。なお、これら突出部と突出部の距離は一部を除き10尺単位でほぼ割り切れることは、この遺構の性格を考えるうえで重要であろう。

第３に、堀底に段差が数ヶ所確認され、その高低差は0.1～0.3ｍである。そのうちの２ヶ所は突出部に付随するような状態である。

第４に、千畳敷北側堀約30ｍの凸部間が存在する区域は、巨石を掘り起こそうとして、途中で放棄されたとみられる一部が深いものの、それを除くと１ｍに満たないところがあ



第６図　千畳敷北側空堀測量図（S=1/300）



※アミカケ部分は、地山掘削土を示す

第７図　空堀に平行する土層断面図（S=1/80）

り、千畳敷南・西側堀とくらべてかなり浅い。堀として機能していたのか疑問さえ抱くほどである。

また、この北側の堀は形状だけではなく、その特異性は土層観察の点からも指摘できる。それは、この凸部と凸部の間に挟まれた凹部の一部に、地山を掘削したときに生じる土が厚さ0.4m程度堆積していたことである。堀を掘ることによって生じた土がそのまま堀底に堆積したと推定されるのである。このことは、堀が掘削工事途中で放棄された可能性が高いことを示すといえよう。これまで、未完成の中世城郭の堀は全国的にみて例がない[2]ことから貴重な発見となった。

そのほか、調査区東端の凸部上に、安山岩の礫を堀に対して直交方向に数個ならべた用途不明の配石遺構を検出したほか、南側堀壁に付随する幅0.5m程度の犬走り状の平坦面

千畳敷北側空堀完掘状況（東より）

千畳敷北側空堀完掘状況（西より）

突出部

空堀土層断面（地山掘削により生じた土が窖部に堆積）

井戸（大石検出状況）

配石遺構

上から、宇土城で初めて井戸跡を確認した。

（2）井戸

素掘りの井戸跡である。楕円形を呈し、規模は長径2.2m、短径1.4m、深さ4mまで確認したところで、これ以上掘ると危険であると判断して底まで確認するにはいたらなかった。堀と井戸の切合い関係を確認することができなかったが、この遺構の時期について考えると、近世の遺物が皆無であることや中世の土師皿、青白磁梅瓶の破片が出土していることから、中世のものと考えられる。また、井戸廃絶時の投げ込みと考えられる大石の上位に、主に地山ブロックで形成される層が存在する。この層は堀底とほぼ同じ高さまで堆積している。

このことから、この層を形成する土は堀の掘削時に生じた排土と考えられ、井戸は堀の掘削前から存在し、堀の築造に伴って埋められた可能性が高い。大石を取り除き、約3m下まで掘り下げたが、その土も地山を掘削したときに生じる土で満たされており、分層もできないような状態であった。つまり、井戸は堀の掘削に伴って生じる排土によって一挙に埋められたと推定される。

（3）配石

第10次調査区の東側末端部で確認した。大きさ約20～35cmの安山岩の礫が7個、堀底に列状に並んでいる。これらは地山直上もしくは数cm土がかんでいる状態であったため、この遺構は堀と同時期のものであろう。

この遺構を検出した際、なぜ堀底にこのような礫が並べられているのかと不思議に感じた。この遺構の性格を考える上で重要なのは出土状態であるが、先述のように①堀の北側壁から堀に直交するようにのび、②堀の中央部付近がこの配石の末端部であり、南側壁までは達していない。このことから、あいついで確認された堀底突出部と同様の機能を果たしていたのではないかと想定している。実際、配石から西側の最も近い突出部間との距離を突出部北側基部から計測した場合、約10尺（3.03m）であることは、先述した突出部群と無関係とはいえないことを示唆している。

（4）平場

昨年度よりも、比較的多くのピット、土坑を検出した。多くは近世以降と思われ、不定形であり建物に伴うと考えられるようなものは現在までのところ確認されていない。

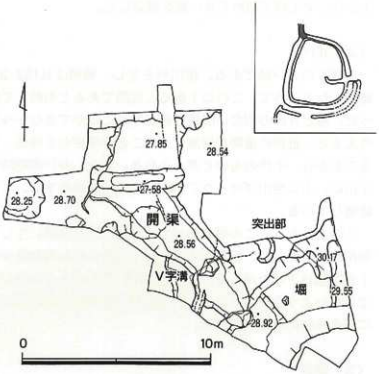
（5）竪堀状遺構

北側空堀に直交するようにして位置する竪堀状の掘りこみである。規模は、上幅約4m、底幅約1.5m、深さ約2m。南側から北側に向かって急激に落ち込んだのち（傾斜約50°）、なだらかに下降する。

この遺構と堀との時期関係であるが、①堀の埋土に堀込みが認められなかったことと、②本遺構の埋土中に礫群（安山岩が主体）集中個所を検出したが、この礫群のうち最も高い位置にあるものは堀のカタにそうような状態で検出した。このため、本遺構が堀の掘削前に存在し、堀の掘削時に伴って埋められた可能性が高く、埋土が版築状を呈し、層が細

かく分けられることからも、このことを傍証するのではないかと想定していた。

しかし、後述する第11次調査で、廃城にともなって遺棄されたとみられる五輪塔の残欠群と同一層に、安山岩を主体とする礫群が堀の外側から投げ込まれたような状態で検出した。この礫群の主体となる石材が安山岩であるということや、特定の場所に集中して投げ込まれていることなどの共通点がある。また、堀北側壁側には竪穴状遺構に通ずる堀の水抜き穴とも考えられる、底幅10cm程度の排水溝状の遺構が存在すること



第8図　開渠測量図（S=1／200）

空堀と竪堀状遺構

竪堀状遺構内礫群出土状況

開渠全景

空堀から開渠を見る

から、現時点では堀と竪堀状遺構が同時併存であった可能性も否定できない。

（6）開渠

千畳敷北西側空堀から抜ける開渠と推定される遺構である。この遺構と隣接する堀底が幅３ｍ、深さ0.3ｍ程度くぼんでおり、その平場側の堀壁面が幅約４ｍにわたって開いた状態になっている。そこが開渠の入口にあたる部分で底部幅0.8ｍとかなり狭い。その入口部分から北方向に底幅を広げながらゆるやかに傾斜する。最も幅が広いところで幅約３ｍ、深さ0.2ｍである。また、入口から約９ｍ北側に開渠とほぼ直行するように幅１ｍ、長さ4.5ｍ、深さ0.8ｍほどの掘りこみが確認された。土層断面を精査しても、切り合い関係が確認されなかったため、開渠と同時期のものと考えてよさそうであるがその性格は不明である。

部分的な調査であり全容は不明であるが、そのままゆるやかに傾斜しながら北側の崖に向かっているものと推測される。実際、平成７年の大雨の際に、この開渠が向かっていると考えられる北側崖面が崩れるという災害が発生したが、その崩れた崖の断面部分に現れた逆台形の掘りこみを木下が実見しており間違いないと思われる。

なお、図示しているように開渠の崖面にＶ字溝の断面が確認された。このことから、これまで千畳敷北側では未確認であったＶ字溝が存在することが確実となった。

（7）Ｖ字溝

第１次調査で確認されたＶ字溝は千畳敷北西側まで確認されていた。しかし、これまで北側へ向かってどのようにのびているかは確認されていなかった。

先述した開渠の調査でＶ字溝の断面が確認されたことや、平場の調査においてＶ字溝の覆土と推測される硬質の黒褐色粘質土を確認した。このことから、この覆土を掘っていないため断言はできないものの、千畳敷北側堀より外側にＶ字溝が存在する可能性は極めて高いであろう。

第３節　出土遺物

堀や平場から中世の土師器皿が大量に出土した。また、雑器類（瓦質の擂鉢・火舎、備前焼の擂鉢・火舎）、輸入陶磁器（宋～明代の青磁、明代の青花・赤絵、緑釉陶器など）、近世陶磁器が出土した。古墳時代前期の土師器の小片も出土した。

出土遺物のうち、特筆されるものとして鉄砲玉があげられる。宇土城において初めての出土で、支城である田平城（宇土市網田町）出土の鉄砲玉のとほぼ同じ大きさ(直径約1.0㎝、重さ10ｇ程度）である。坩堝も出土していることから、小規模な鍛冶行為が千畳敷で行われたことがうかがえる。

鉄砲玉

坩堝

1) 障子堀（堀内部障壁遺構）とは、内部に障壁状の仕切がある堀のことをいう。分布は、関東地方に多く、特に後北条系城郭に多用されるという遍在性は認められるが、これまで北は岩手県、南は岡山県まで確認されている。

2) 千田嘉博氏のご教示。

第Ⅴ章　第11次発掘調査

第１節　調査の経過

第11次調査は、平成11年７月から平成12年２月までの約８ヶ月間にわたり千畳敷北東側から東側の堀と平場の調査を行った。この地区は過去にトレンチ調査を行い、堀が存在することは事前に確認していた。そのほかに、千畳敷北側の斜路について調査を行った。

第２節　遺構

（１）堀

千畳敷北東側から東側の堀の調査を行った。規模は上幅3.9～5.9ｍ、底幅2.1～3.7ｍ、深さ1.4～2.0ｍ、堀断面の傾斜角度は45°～65°である。登城口付近が最も広いが、曲輪入口の守りを固める意図があったためであろうか。

この地区に関しては、千畳敷北側の斜路は城が使われていた当時も機能していたか否かを確認するうえで重要であった。この斜路につうじる土橋か木橋の痕跡が調査で確認されるならば、斜路が機能していた可能性が高いと考えられるからである。しかし、調査の結果から土橋もしくは木橋の痕跡は確認されなかったため、斜路から平場側に渡る施設はなかったと考えられる。

千畳敷東側空堀空中写真（西より）

空堀調査状況

空堀調査状況

千畳敷東側空堀土層断面

また、第10次調査で検出されたように堀底に20～30cm程度の段差を２ヶ所確認した。

遺構検出の段階で、一部平場を確認されない部分があり、掘り進めていくと、堀に直行する竪堀状の掘りこみを確認するとともに、堀からこの竪堀に通じるように排水溝とみられる溝を確認した。

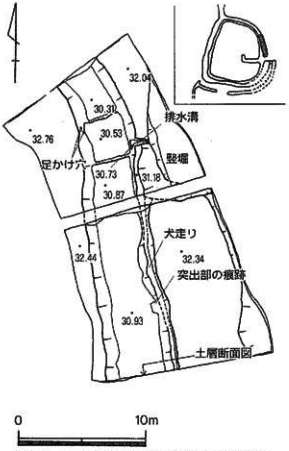
そのほかに、平場側に幅40cm程度の犬走りを検出した。これは先述した竪堀の末端部から登城口の土橋までという短いのものであり、竪堀から平場にのぼるための施設ではないかと思われる。また、千畳敷側の堀の壁体に足かけ穴とみられるピットが確認された。これは、堀底から上に上るために使用されたと考えられる。このような足かけ穴を残すことは防御上、好ましくないと考えられるのであるが、完成していたとみられる千畳敷南側・西側堀においては足かけ穴が確認されていないこともあわせ、千畳敷の堀が未完成だったことの根拠のひとつとしてあげることができよう。

さらに、堀東側壁に１ヶ所、第10次調査で確認された突出部の痕跡と推定される地山の掘り残しが確認された。堀にほぼ直交

空堀と竪堀（東より）

堀と排水溝

堀壁面の「足かけ」と推定される穴



第９図　千畳敷東側空堀測量図（S=1/300）

するような状態で残されており残存幅0.8m、長さ0.4mである。堀を掘削していたある段階で壊された可能性が高い。

そのほか、特筆される事例して第8次調査で登城口付近の空堀から確認された五輪塔残欠群の末端部が確認されたことがあげられる。千畳敷側のものは、堀埋土の中層から出土していることから千畳敷にあったものが転落した考えられ、全て同時期投棄とはいえないようである。先述のように、この五輪塔残欠群と同一の層に平場側から投げ入れたとみられる礫群が確認されたが、これらも廃城に伴うものであると考えられる。これらは、堀の埋土の堆積状況から判断して、堀底が10～20cm程度埋まった段階で投棄されたとみられる。

五輪塔残欠（地輪）

礫群出土状況

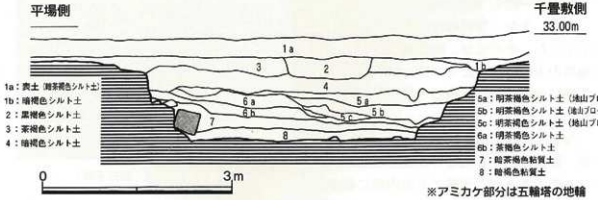
斜路（下から）

（2）竪堀

最大幅約10m、最深部約1.5mの竪堀である。堀はこの竪堀を避けるようにやや内側（千畳敷側）にカーブしていることから、まず、竪堀が存在していて、その後堀が掘削されたと考えられる。堀掘削後は、土層断面に切合い関係が確認されないことから併存していた可能性が高い。

（3）排水溝

上幅0.5m、底幅0.1m、深さ0.5mと小規模な排水溝である。堀側から竪堀側にむか



※アミカケ部分は五輪塔の地輪

第10図　千畳敷東側空堀土層断面図（S=1/60）

って傾斜しているため、排水溝が機能していれば排水溝の底の高さ以上には堀に雨水が溜まることはなかったと考えられる。実際、堀底に雨水が溜まらない登城口付近の堀から北約20ｍの区間の堀底は整形された痕跡がみられず、ボコボコした状態である。このことから、この部分は堀の深さを増すために、いずれ掘り下げられる予定であったのかもしれない。なお、排水溝のレベルが堀底のレベルより高いが、おそらく堀の掘削が進んで現状のように排水溝底のレベルが堀底より高くなったと考えられる。

（4）平場

堀の外側に幅５～６ｍの平場がめぐる。第10次調査よりもピットの数が少なく、ピットの大きさも小規模であり建物跡になるようなものは確認されなかった。また、明確に柵列と推定できるピットも確認されなかった。

（5）斜路

千畳敷北側に位置する幅４ｍ、長さ20ｍの千畳敷に上るための道である。この道は、戦後、千畳敷が耕作地になっていたときに重機によって掘削されてできたものである。この道が、城が使用されていた当時、搦手に該当するような小道を拡張するようにして造られたものではないかといわれているところである。大幅に改変されているため、たとえここに当時の道があったとしても確認される可能性は低かったが、一部でもその痕跡が確認されないか期待された。

調査の結果、やはり当時の道の痕跡は確認されなかった。斜路の入口部分が幅２ｍ、長さ10ｍのわたりに人為的に掘削されたと思われる地点が確認されたが、平坦面などは存在せず道として機能するものではないと思われる。

第３節　出土遺物

堀から中世の土師器皿が多量に出土し、雑器（瓦質土器の擂鉢・火舎、備前焼の擂鉢、輸入陶磁器（青磁、染付など）が出土した。青磁は宋～明代、染付は明代（15～16世紀代）である。また、宋代の古銭や五輪塔の残欠が出土した。そのほか、阿蘇溶結凝灰岩製の五輪塔の火輪を模したミニチュアや、昨年度宇土城において初めて確認された鉄砲玉が出土した。

弥生小型仿製鏡（鏡式不明）

なお、斜路の遺構検出時に出土した弥生小型　製鏡が出土したことは注目される。鏡式は不明であるが、平縁でその内側に櫛歯文が

配されるのが確認できる。鏡背に赤色顔料が付着していたことから、弥生時代の墳墓がこの地に存在したことを示唆するものとして注目される。[1]

1）第1次調査で弥生終末期の土器が出土しているという（高木氏の教示）。

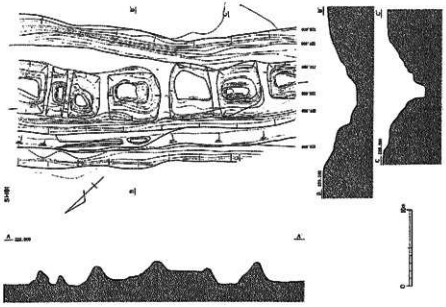
第Ⅵ章　考察

第１節　千畳敷北側堀跡について

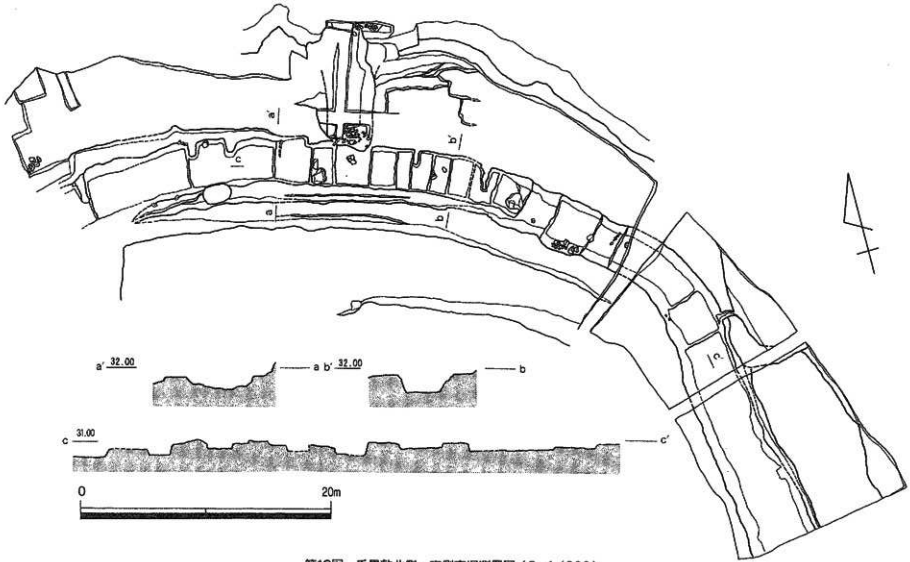
千畳敷北側空堀は、これまで確認されていた千畳敷南側および西側をめぐる堀と異なり、いわゆる障子堀（堀内部障壁）のような状態である。しかし、宇土城で確認されたものは障子堀ではなく、以下の理由から掘削途中で放棄されたことを示す痕跡ではないかと想定した。

第10次調査報告のとおり、堀底に残された凸部の形態は「幅広でほぼ直角に立ち上がった低い土手状の高まり」といった形状を呈し、他地域の障子堀のように「幅が狭い土の壁が堀内部を仕切る」というような形態ではない。また、堀壁に直交する突出部と配石遺構についても、管見の限り１例も確認されていないようである。さらに、凸部が存在する区間の堀の深さは、その他の区間にくらべて非常に浅いことが指摘される。

また、堀に堆積した土層の観察結果から、地山を掘削したときに生じる土が凹部の一部に厚く堆積しているが、これは堀を掘削するとき生じた排土と想定される。つまり、掘削時に生じた排土が除去されず、そのまま堀の底に残された様子がうかがえる。このことは、凹部内の堀底堆積上において黒色または黒褐色粘土層が形成されていない（つまり、すぐに堀底が埋まったといえる）ことからも傍証されよう。そのほかにも、開渠・排水溝の存在から、堀内部障壁の用途のひとつとして指摘されている「水溜め効果」をねらっているとは考えられない。



第11図　若松城（福島県会津若松市）の障子堀（S=1／500）　　会津若松市教育委員会1994より



第12図　千畳敷北側・東側空堀測量図（S=1／300）

このように、堀の形態は、他地域で確認されているような障子堀とは異質のものであることが明確である。また、土層観察から堀は掘削途中に何らかの理由で中止されたものと考えられることから、未完成の堀であった可能性が高い。

掘削途中であったことを考慮した場合、堀底の凸凹は掘削単位（いわゆる「小間割」）の痕跡と推測するのが最も素直な考え方ではなかろうか。堀をある間隔ごとに区画して掘削を進め、区間ごとの進捗状況が堀底の凸凹に現れているのではないかと考えられる。最終的にはこの凸部も取り払われて千畳敷南・西側堀のような形状に仕上げる予定だったと推定され、断面逆台形の箱堀を成形する工事のある段階を示しているのだろう。具体的にいえば、凹部区間で堀を深く掘って見本形をつくった後、その形に基づいて隣接する凸部をこの見本形のかたちに合わせて掘削する。これを数回繰り返すことによって完成形である断面逆台形に仕上げるのではないだろうか。

小間割については、群馬県の未完成中世用水路「女堀」が著名である。幅約30m、深さ約5mと大規模で、掘削範囲を設定して掘削を行っている。宇土城の堀も工事区間を区切って掘削するという共通する要素をもつ。中世城郭の堀と中世の用水路という用途の違いから遺構の性格を同系列には語れないとはいえ、堀を掘るにせよ、用水路を掘るにせよ大規模な土木工事を行う場合は、ただやみくもに作業を進めるのではなく、掘削する範囲などを設定して計画的・能率的に工事を進めたとみて間違いなかろう[1]。

今回は、報告をかねた程度にまとめたが、全国的な事例を含めた検討は機会を改めて報告することにしたい。

※堀の解釈については、千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館）、池田光雄氏（中世城郭研究会）ならびに第Ⅰ章第2節の調査協力機関に記した各位から、資料や報告書提供、ご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。

〈参考文献〉

会津若松市教育委員会　1994『若松城城東町遺跡発掘調査報告書』会津若松市文化財調査報告書45
小笠原　清　1988「障子堀・堀障子および堀底特殊構造について」上『小田原』－歴史と文化－2（小田原市）
小笠原　清　1989「障子堀・堀障子および堀底特殊構造について」下 同上3（小田原市）
池田　光雄　1989「堀内部障壁の一形態について」『中世城郭研究』3（中世城郭研究会）
池田　光雄　1998「障子堀について」第15回全国城郭研究者セミナー資料
井上　哲朗　1998「堀内障壁の分類と編年試案」同上
小和田哲男　1986「後北条氏築造技法の特色」『郷土神奈川』19（神奈川県立文化資料館）
北垣聡一郎　1980「一番槍がのこした攻城記」『歴史と人物』112（中央公論社）
田代　道弥　1981「初期小田原城遺構の発見」『歴史手帖』9・12（名著出版）
田代　道弥　1983「戦国最大小田原城の遺構」『歴史と人物』141（中央公論社）
土屋比都司　1977「山中城址の発掘」『歴史手帖』5・4（名著出版）

第２節　第９～11次調査出土の土器・陶磁器について

〈国内産の土器・陶磁器〉

在地産の土師器皿や瓦質土器、備前焼などが出土した。

土師器皿は、出土遺物の90％以上の割合を占める。在地で大量生産・大量消費されたものと考えられ、ほとんどが軟質で、焼きが悪く、器壁も厚いため粗雑な印象をうける。一部に油痕が残る土師器皿があるが、これは灯明皿として使用されたものであろう。形態や成形・調整手法、法量などから分類できる。

瓦質土器は、擂鉢、火舎、羽釜などの雑器類で占められる。青灰色で焼きが良く硬質なものと、白灰色で焼きが悪く軟質なもの、赤褐色の土師質のものなどがあり、これも同じく形態や成形手法、調整手法、法量などにより分類することが可能であろう。とくに、火舎に関しては、深鉢と浅鉢とに大きく分類でき、胴部の突帯の本数や突帯間の距離、脚の形態、文様の種類や数などによって細分できるようである。

在地産以外の土器・陶磁器として、備前焼の擂鉢、火舎、大甕、美濃産の天目茶碗があげられる。在地産のものにくらべて出土量はかなり少ない。

そのほかにも、近世陶磁器が出土しているが、輸入陶磁器にくらべ少量である。おそらく廃城後に持ち込まれた物であろう。

〈輸入陶磁器〉

青磁、白磁、染付をはじめとする中国産陶磁器が大半を占める。

青磁は、破片が多く器形を復元できるものは少ない。器種は碗や皿などがあるが、なかには香炉も出土している。文様が確認できるものは比較的少ないが、青磁碗は蓮弁文が多く、そのほかに雷文などが施されているものがある。青磁皿は稜花皿や菊皿などがある。大半は龍泉窯系のものと思われるが、ごく一部に色調が黄緑色で櫛描文が施された同安窯系の青磁と思われるものも含まれている。出土した青磁の時期は13～16世紀（宋～明代）である。なお、青白磁の梅瓶、青磁の盤など比較的大型の器種も出土している。白磁は青磁や染付にくらべて出土量がかなり少ない。時期は15～16世紀頃であろう。

染付は碗および皿が出土している。染付碗は、外面に唐草文、見込部に法螺貝文や牡丹唐草文が描かれたものなどがある。染付皿は高台がつくものと高台が付かない碁笥底のものが出土しており、胴部外面に芭蕉葉文、内面に四方襷文などが描かれたものがある。なかには、見込部や高台内に「天下太平」や「大明年造」と銘を有するものもある。これら染付の時期は、15世紀後半から16世紀後半頃までが中心であるが、最も新しいもので、16世紀第４四半期頃から17世紀前半のもの（小野編年皿Ｆ群）が出土していることから、この時期まで城として機能していたと考えられる。また、赤絵が出土していることは注目される。

そのほかに、出土数はかなり少ないが華南産と推定される緑釉陶器、二彩などが出土している。また、特筆される遺物として、タイ産と考えられる四耳壺の底部から胴部が出土したことがあげられる[2)]。これまで九州各地で確認されていたが、熊本県ではこれまで未

報告と思われる。まだ未整理の遺物のなかに東南アジア産土器・陶磁器が存在する可能性があるため、今後、継続して遺物整理・資料収集を進めていく予定である。

※宇土城出土の輸入陶磁器に関しては、熊本市教育委員会の美濃口雅朗氏、福岡市教育委員会の森本朝子氏に多くのご教示をいただいた。記して感謝いたします。

〈参考文献〉

青山洋治　1999「南海の陶磁貿易」『季刊考古学』第66号（雄山閣出版）
上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2（日本貿易陶磁研究会）
小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」　同上
亀井明徳　1981『熊本県城南町出土の青磁資料』『貿易陶磁研究』№1（日本貿易陶磁研究会）
鈴木重治　1981「京都出土の中国産輸入陶磁器」－14C・15Cを中心に－　同上
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』（真陽社）
手塚直樹　1999「東アジアの陶磁器生産」『考古学ジャーナル』№448（ニューサイエンス社）
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』№2（日本貿易陶磁研究会）

土師器皿

土師器皿（灯明皿）

擂鉢

火舎

備前焼

天目茶碗

白磁

青白磁梅瓶

赤絵

施釉陶磁器

タイ産・中国産の陶器類

青磁

染付

1) 作業単位を示す事例として、時代を大幅にさかのぼるが、弥生時代の環濠に掘削単位が認められる。また、葺石を有する古墳にみられる区画石（目地がとおった葺石）も、一定の作業単位を示していると考えられている。

2) この四耳壺に関しては、第一次調査時に出土した四耳壺（半山・高木ほか1977のp75に掲載されているT3）と同一個体である

第Ⅶ章　結語

最後に、第9～11次調査の成果や今後の調査についてまとめたい。

遺構に関していうと、千畳敷北側堀の調査で判明したいくつかの所見から、堀が未完成だった可能性が高いことが判明した。全国的にみても、未完成と推定される堀はこれまで発見されておらず、中世城の堀がいかにして掘られていたのかがわかる事例として、たいへん貴重な発見である。また、これまで確認されていなかった開渠や井戸、竪堀状遺構、排水溝などが検出されるなど、千畳敷北側や東側堀においていくつかの重要な遺構が確認された。

また、廃城の様子を示す五輪塔の残欠群が確認されるとともに、安山岩を主体とする礫群がその残欠群とほぼ同時期に堀に投棄されていたことが判明した。

中世以外では、これまで千畳敷南側と西側までしか確認されていなかった古墳時代のV字溝が、千畳敷の北側で確認されたことも新たな知見として加えておきたい。

出土遺物に関していうと、土師器皿が大量に出土し、雑器類も比較的豊富に出土したことは在地産土器の分類・編年作業を行ううえで貴重な資料になるだろう。また、青磁、染付をはじめとする輸入陶磁器も大半は細かい破片ではあるが比較的出土量が多い。なかには、赤絵皿や青白磁梅瓶など県内でも出土例がまれな陶磁器も出土している。そのほかに、タイ産と考えられる四耳壺が出土したことによって、県内にも東南アジア産の陶磁器が流通していたことが確実となった。当時の交易がアジア的規模で行われたことを示す資料として重要である。

中世以外では、弥生時代の小型仿製鏡の出土が注目される。古墳時代前期の首長居館が成立する以前に集落や墳墓が存在した可能性が高いと考えられる。

最後に、来年度以降の調査予定だが、まず未調査である残り6分の1程度の堀および登城口の調査を優先して実施したい。さらに、先後関係が不確定であった第10次調査区の堀と竪堀状遺構との先後関係を確定すべく、竪堀状遺構内の礫群を全て取り上げて何らかの手がかがりを得たいと考えている。また、本報告に向けて多量に出土した遺物の整理作業を継続的に進めていきたいと考えている。

報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと(にしおかだい)
書名	宇土城跡（西岡台）Ⅲ
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ号	第21集
編集者名	藤本貴仁
編集機関	宇土市教育委員会
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うとじょうあと 宇土城跡	うとしし 宇土市 めまちあざせん 馬町字千 じょうば 畳敷	43211		32° 40′ 34″	130° 38′ 54″	199706 ｜ 200002	1900m²	学術調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中世城	中世 古墳	空堀(中世) V字溝（古墳）	土師器皿、瓦質土器、青磁、染付	掘削途中の空堀である可能性が高い	

宇土城跡（西岡台）Ⅲ
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第21集

発行年月日 2000年3月31日
編集・発行 熊本県宇土市教育委員会
〒869-0433
熊本県宇土市新小路町95
印　　刷 コロニー印刷